

和歌  
集

風雅和歌集

和歌集



百八分

金檢御下  
七拾五の  
印

昔

百八分

仁心ありては徳あり  
徳ありては財あり  
財ありては力あり  
力ありては徳あり  
由はたすべし

古き徳ありては

徳ありては財あり

財ありては力あり

力ありては徳あり

徳ありては財あり

財ありては力あり

力ありては徳あり  
徳ありては財あり

一  
三  
百  
三  
拾  
五  
の  
印

上徳居

三  
拾  
五  
の  
印

心之所至  
身之所往  
行之所至  
言之所至

百介月

一重玄界

此人所至  
身之所往  
行之所至  
言之所至  
心之所至

身之所往  
行之所至  
言之所至  
心之所至

身之所往  
行之所至  
言之所至  
心之所至

心之所至

身之所往

行之所至  
言之所至

伏見宮邦高親王風雅和歌集  
印

権札

伏見宮邦高親王風雅和歌集全部  
印



休見官邦高親之風雅和歌集  
印改札

権札

夫時奇者 下 徳子二  
屋内也々々々 忌結也々々々  
馬子田羊本二册百  
子十



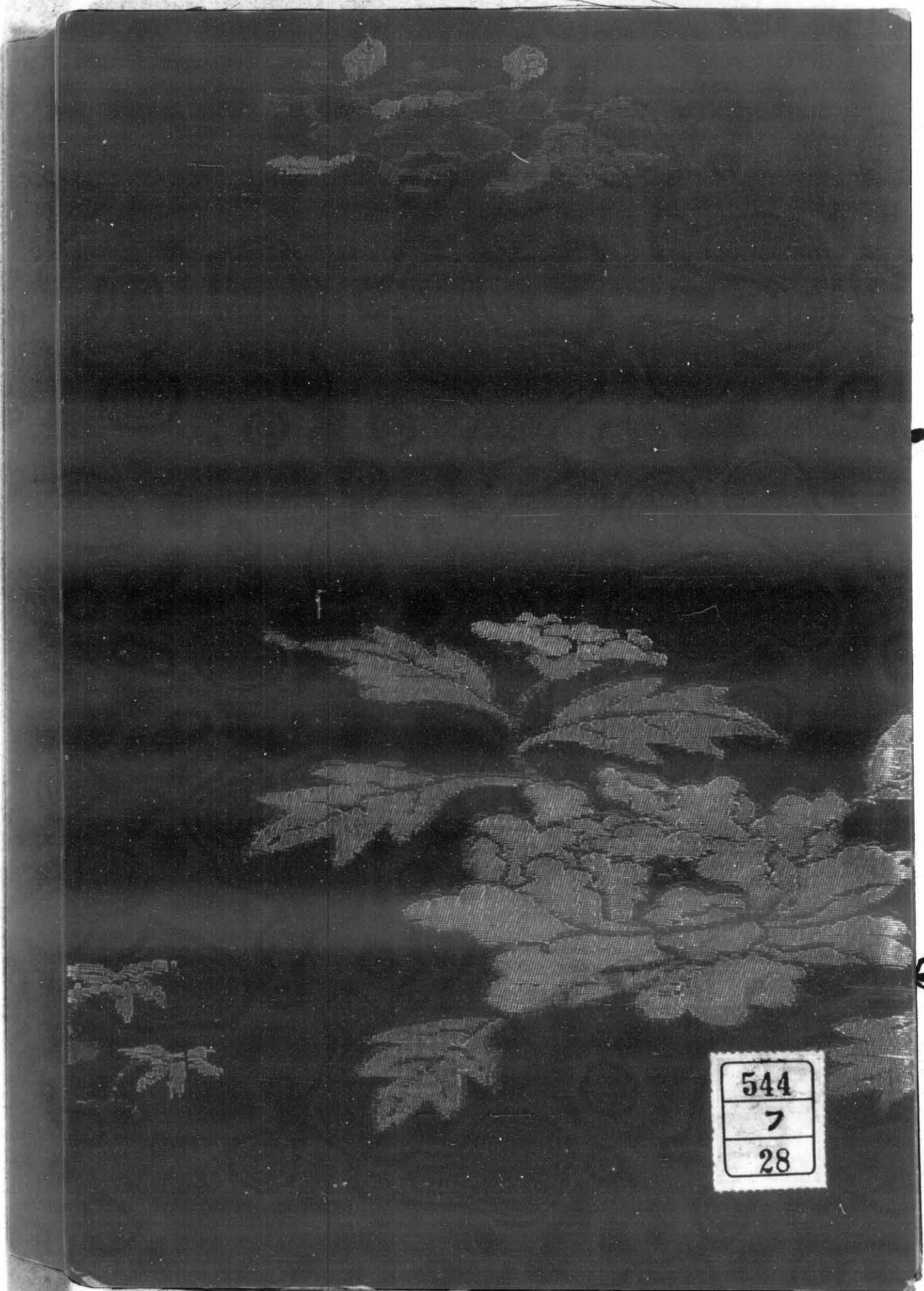
0

150 cm

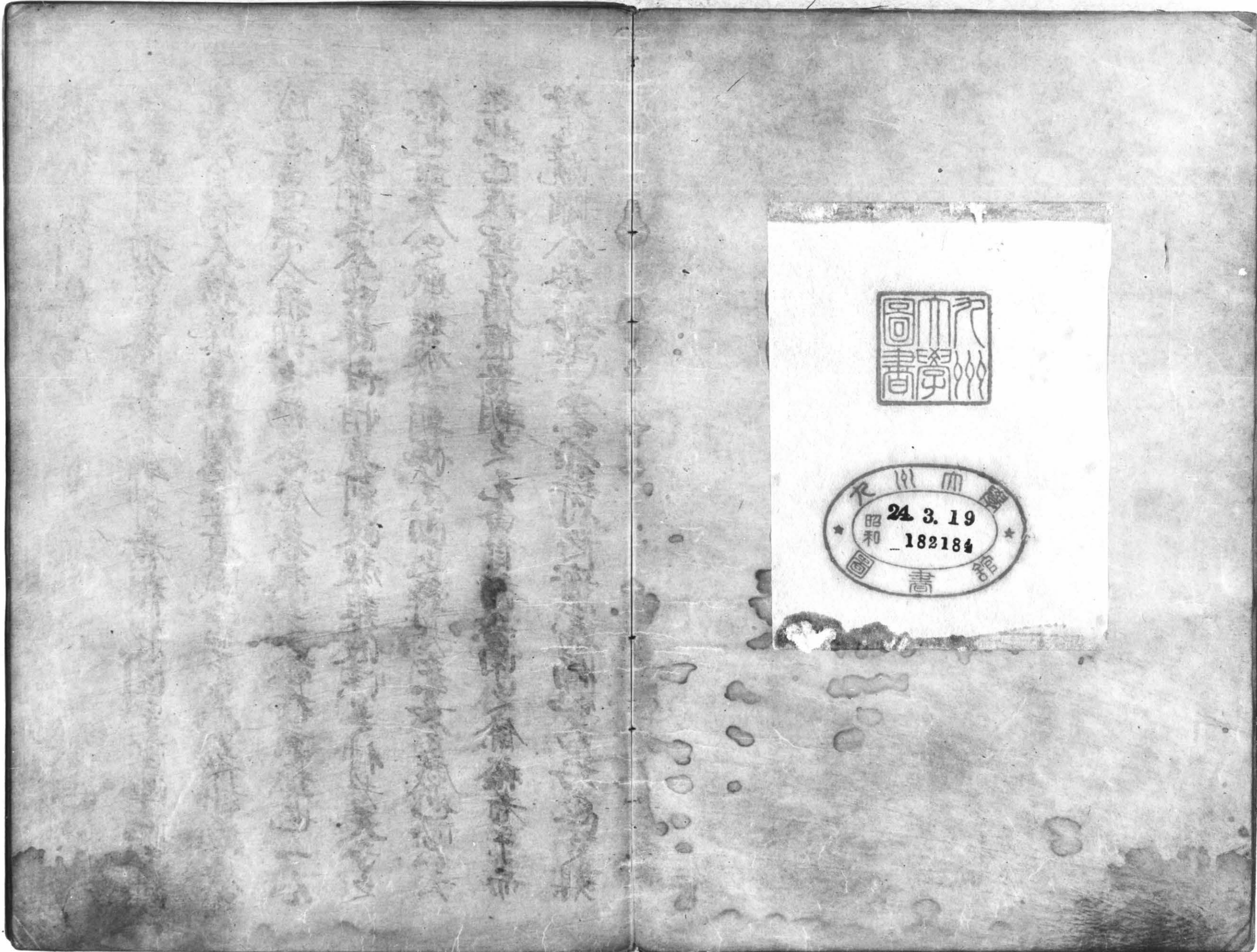
10

SEKISUI JUSHI

20



544
7
28



風雅和詩集序

夫吟詩者氣象充塞乾坤意想範圍宇宙渾沌未剖  
其理自有人物既生其製述者風雲乎乎之卦於核  
感也萬彙入雅興之場思慮哀樂之發於京報也一公  
為諷諭之本以詠性情美刺政教難波津之什若天子之  
德也聖人之風始被一朝漢東山之舞若采芣之戲也賢若  
之化已及四方情憶昔朝之元由自指二南之餘裕若平而  
世近曉隨人趨浮華不念和奇之實為偏以為好色之媒

近代之弊在於益巧益密推以倚廉取利為事竊古語  
佻艷詞修飾而成之選幅乎大本或以鄙俚庸俗之語直  
本拙意不知風雅不在並以不足觀者也淳風質朴情理  
之本孰不據此而暗於態度而猥取之者此述化之意也情  
巧辭華麗之美何以加旃而寧於興味而苟好之者夫  
雅正之辨又風<sup>米</sup>勸高台詠兼含蓄之情句法欲精微易  
入細研之失劫直則成怒振之氣煖拖之有懦弱之病論  
其辨裁不遑毛舉乃如文質于備意句共列者且忘言



得自豈假筆舌盡乎物而謂之不達其本源者多滿  
彼末流寧只須深志於古風不可假步於邪佳者耶三  
代集以後得其意者僅不過數字其或有昇堂不入室  
况項字以來我歎息有餘為教此類風向溫元久如事適  
合風雅者鳩集而成編天下無可弃之言故博采編訪自  
上古至當世集而錄之命曰風雅和齊集茲推握圖自推  
運數脫蹤不為神仙猶惟有方林涉路詢既而得三編多  
間暇刻漫煙氣早收春馬徒遠在山之風霜刑不用秋

茶室朽草野之露衆切已興廢積方悲惟行善而必  
舉一物之失不有嗥此道久廢俗流不分淫謂所以有此  
撰非偏採華詞濂濂考壯一時之觀專欲舉正風雅刻  
步遺言載之美者也于時貞和二年十一月九日梳立誓

菜園記大德系

Handwritten text in a cursive script, likely a continuation from the reverse side. The text is faint and difficult to decipher due to fading and bleed-through.

Handwritten text in a cursive script, likely a continuation from the reverse side. The text is faint and difficult to decipher due to fading and bleed-through.

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 10 lines of dense, cursive writing.

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 10 lines of dense, cursive writing.

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 10 lines of dense, cursive script.

Handwritten text in Arabic script, consisting of approximately 10 lines of dense, cursive script.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is arranged in approximately 15 vertical columns, reading from right to left. The script is dense and characteristic of traditional East Asian calligraphy. The paper shows signs of age, including some staining and discoloration.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript, spanning two pages. The text is written in dark ink on aged, slightly yellowed paper. The script is dense and continuous across both pages, with some variations in line thickness and spacing. The right page shows a clear vertical line of text, while the left page has some faint, overlapping lines that suggest ghosting or bleed-through from the reverse side. The overall appearance is that of an old, well-used manuscript.

風雅和詩集卷第一

春哥上

去上 春哥上

去上 春哥上

是日山出たての春の歌をよみて

春の年をよみし春の歌をよみて

白鳥の歌をよみて

九条の山をよみて

元日歌

後世の歌をよみて

平家朝臣の歌をよみて

建仁元年の歌をよみて

後世の歌をよみて

初日の歌をよみて

子春の歌をよみて

後世の歌をよみて

山をよみて

初日の歌をよみて

後世の歌をよみて

霞をよみて

紫雲の歌をよみて

よみて

進子の親

ふつふつと

ふつふつと

ふつふつと

ふつふつと

ふつふつと

ふつふつと

ふつふつと

ふつふつと

ふつふつと

ふつふつと

源順

ふつふつと

ふつふつと

ふつふつと

源順

ふつふつと

ふつふつと

源順

ふつふつと



あゝ

うきうき

春のあけはれはうきうき

春のあけ

春のあけはれはうきうき

うきうき

春のあけ

春のあけはれはうきうき

うきうき

春のあけはれはうきうき

うきうき

春のあけ

春のあけはれはうきうき

春のあけはれはうきうき

春のあけ

春のあけはれはうきうき

うきうき

春のあけ

春のあけはれはうきうき

うきうき

春のあけ

春のあけはれはうきうき

春の山に 伏見院の寺

夕の曉の影のまはる梅影はしづかに春の空に花の心

私不知

亦細く為兼

春の山に 伏見院の寺

堤の石の子

白雲の影のまはる夕の空に花の心

安治二年後醍醐天皇

比叡

東海寺の御本願寺

春の山に 伏見院の寺

夕の曉の影のまはる梅影はしづかに春の空に花の心

比叡

亦細く為兼

春の山に 伏見院の寺

私不知

夕の曉の影のまはる梅影はしづかに春の空に花の心

亦細く為兼

春の山に 伏見院の寺

私不知

亦細く為兼

春の山に 伏見院の寺

後高橋殿の御書に於て御成の六百歳年令一の  
ありては御成の御成の御成

亦御成の御成

ありては御成の御成の御成の御成の御成の御成  
亦一今春也

に御成の御成

昔聞きの御成の御成の御成の御成の御成の御成  
可貴なる御成の御成の御成の御成の御成の御成  
ら御成の御成の御成の御成の御成の御成の御成  
亦御成の御成の御成の御成の御成の御成の御成

亦御成の御成

御成の御成の御成の御成の御成の御成の御成  
御成の御成の御成の御成の御成の御成の御成  
伏見院御成

御成の御成

亦御成の御成

御成の御成の御成の御成の御成の御成の御成  
御成の御成の御成の御成の御成の御成の御成  
亦御成の御成の御成の御成の御成の御成の御成

亦御成の御成

春の心は花の影に似たり  
花の影は春の心にあらず

日影の移りゆくを  
春の心は花の影に似たり

伏見院清年

春の心は花の影に似たり  
花の影は春の心にあらず

花の影は春の心にあらず  
春の心は花の影に似たり

春の心は花の影に似たり  
花の影は春の心にあらず

春の心は花の影に似たり  
花の影は春の心にあらず

春の心は花の影に似たり  
花の影は春の心にあらず

春の心は花の影に似たり  
花の影は春の心にあらず

春の心は花の影に似たり  
花の影は春の心にあらず

春の心は花の影に似たり  
花の影は春の心にあらず

平の御代に於ては

御代

御代に於ては

御代

御代に於ては

御代

御代

御代に於ては

御代

御代に於ては

御代に於ては

御代に於ては

御代

御代に於ては

御代

御代に於ては

御代

御代

御代

御代に於ては

御代

御代

御代に於ては

春の年暮し 梅の花は春の夜

梅の花は春の夜 梅の花は春の夜

亦春の夜梅の花

梅の花

梅の花は春の夜 梅の花は春の夜

春の夜梅の花

梅の花は春の夜 梅の花は春の夜

梅の花

梅の花は春の夜 梅の花は春の夜

梅の花は春の夜 梅の花は春の夜

梅の花は春の夜 梅の花は春の夜

梅の花

梅の花は春の夜 梅の花は春の夜

梅の花

梅の花は春の夜 梅の花は春の夜

梅の花

梅の花は春の夜 梅の花は春の夜

梅の花

梅の花は春の夜 梅の花は春の夜

梅の花

梅のついで

心持よく昔の梅を待たせし 雪の地のさうし梅は

子春梅の家より 今も清く

ありはし 昔も梅のついで

梅村梅の 梅のついで

心持よく昔の梅を待たせし 雪の地のさうし梅は

梅のついで 梅のついで

梅のついで 梅のついで

梅のついで 梅のついで

梅のついで

春のついで 梅のついで

梅のついで 梅のついで

梅のついで 梅のついで

梅のついで 梅のついで

梅のついで 梅のついで

梅のついで 梅のついで

梅のついで 梅のついで

梅のついで 梅のついで

梅のついで 梅のついで

抄一カ

前僧正慈鎮

梅の香に人ぞ打しは梅よりけりか梅は花も

春の香に人ぞ

後僧正慈鎮

梅の香に人ぞ打しは梅よりけりか梅は花も

春の香に人ぞ

人麿

梅の香に人ぞ打しは梅よりけりか梅は花も

後人

梅の香に人ぞ打しは梅よりけりか梅は花も

梅の香に人ぞ打しは梅よりけりか梅は花も

亦納る家

梅の香に人ぞ打しは梅よりけりか梅は花も

春の香に人ぞ

祝成中

梅の香に人ぞ打しは梅よりけりか梅は花も

夜梅

中勢

梅の香に人ぞ打しは梅よりけりか梅は花も

抄一カ

亦納る家

梅の香に人ぞ打しは梅よりけりか梅は花も

亦納る家

梅の香に人ぞ打しは梅よりけりか梅は花も

百首の心

進子由親



家もはなもく花梅のわが心はわが心

梅の心は

亦梅の心

梅の心はわが心はわが心はわが心

梅の心は

院の心

梅の心はわが心はわが心はわが心

永梅の心

梅の心はわが心はわが心はわが心

梅の心は

永梅の心

梅の心はわが心はわが心はわが心

梅の心は

和泉の心

梅の心はわが心はわが心はわが心

風雅和詩集卷第三

春哥下

百首下中 院中下

凡の事勢のこぼれにふりては柳の文林の情

心いふ 控領の藩

春風あつし柳のあつらふらふにふりては文林の情

中一頁下中 柳下

伏見院中下

浮世の心はしつゝあつらふらふにふりては柳の文林の情

春風あつし柳のあつらふらふにふりては文林の情

亦つては柳

一いつは柳のあつらふらふにふりては文林の情

柳下中 西園寺中 中

春風あつし柳のあつらふらふにふりては文林の情

後子中 親し

春風あつし柳のあつらふらふにふりては文林の情

百首下中 中

控領の藩

春風あつし柳のあつらふらふにふりては文林の情

右雨柳と

古山院清中

舟に乗りて柳を渡る人を見れば春の風を思ふ

春の風

春の風

舟に乗りて柳を渡る人を見れば春の風を思ふ

春の風

舟に乗りて柳を渡る人を見れば春の風を思ふ

春の風

舟に乗りて柳を渡る人を見れば春の風を思ふ

春の風

舟に乗りて柳を渡る人を見れば春の風を思ふ

古集の百と云ふは古の集りて昔精新柳菰植

水

水

舟に乗りて柳を渡る人を見れば春の風を思ふ

柳

柳

舟に乗りて柳を渡る人を見れば春の風を思ふ

春の風

舟に乗りて柳を渡る人を見れば春の風を思ふ

人丸

舟に乗りて柳を渡る人を見れば春の風を思ふ

春の風

梅のこぼれ花は春の風をよそよそしく吹かす

春の風

春の風は梅のこぼれ花をよそよそしく吹かす

春の風

梅のこぼれ花

梅のこぼれ花は春の風をよそよそしく吹かす

春の風

梅のこぼれ花は春の風をよそよそしく吹かす

春の風

梅のこぼれ花

梅のこぼれ花は春の風をよそよそしく吹かす

春の風

梅のこぼれ花は春の風をよそよそしく吹かす

春の風

梅のこぼれ花は春の風をよそよそしく吹かす

春の風

梅のこぼれ花は春の風をよそよそしく吹かす

春の風

梅のこぼれ花

梅のこぼれ花は春の風をよそよそしく吹かす

春の風

梅のこぼれ花

春の女は... 花の香りに... 春の女は...

春の女は...

春の女は... 花の香りに... 春の女は...

春の女は...

春の女は... 花の香りに... 春の女は...

春の女は...

春の女は... 花の香りに... 春の女は...

春の女は...

春の女は... 花の香りに... 春の女は...

春の女は...

春の女は... 花の香りに... 春の女は...

春の女は...

春の女は...

春の女は... 花の香りに... 春の女は...

春の女は...

春の女は... 花の香りに... 春の女は...

春の女は...

春の女は... 花の香りに... 春の女は...

春の女は...

徳也一はくもた美の長くありしや人の目

未十世の心 後徳也

平の心もつれはあふくはく徳もあふく

心一か 人唐

わが心もあふくしるるも徳もあふく

徳也 徳也

人の心もあふくしるるも徳もあふく

徳也 徳也

はくもた美の長くありしや人の目

徳也 徳也

徳也一はくもた美の長くありしや人の目

徳也 徳也

はくもた美の長くありしや人の目

徳也

はくもた美の長くありしや人の目

徳也

はくもた美の長くありしや人の目

徳也

徳也

はくもた美の長くありしや人の目

赤の字とある 迄に信託

今更なる事 今更なる事 今更なる事

信託 存案 存案

今更なる事 今更なる事 今更なる事

北極 北極

今更なる事 今更なる事 今更なる事

康賢 康賢

今更なる事 今更なる事 今更なる事

今更なる事 今更なる事 今更なる事

信託 信託

今更なる事 今更なる事 今更なる事

信託 信託

今更なる事 今更なる事 今更なる事

信託 信託

今更なる事 今更なる事 今更なる事

今更なる事 今更なる事 今更なる事

信託 信託

鴨長明

今更なる事 今更なる事 今更なる事

赤雲 赤雲

はるかにあけぬるもあけぬるはるかにあけぬる

春のあけぬる 初平の記

はるかにあけぬるもあけぬるはるかにあけぬる

春のあけぬる 水梅の流るる時

はるかにあけぬるもあけぬるはるかにあけぬる

伏見院西園寺の春のあけぬる

春のあけぬる 春のあけぬる

はるかにあけぬるもあけぬるはるかにあけぬる

春のあけぬる 春のあけぬる

はるかにあけぬるもあけぬるはるかにあけぬる

人春

はるかにあけぬるもあけぬるはるかにあけぬる

はるかにあけぬるもあけぬるはるかにあけぬる

春のあけぬる 春のあけぬる

はるかにあけぬるもあけぬるはるかにあけぬる

春のあけぬる 春のあけぬる

春のあけぬる

はるかにあけぬるもあけぬるはるかにあけぬる

春のあけぬる 春のあけぬる

はるかにあけぬるもあけぬるはるかにあけぬる



光明寺入道藤原光俊

十三年 藤原光俊の御子 藤原光俊の御子 藤原光俊の御子

藤原光俊

藤原光俊の御子 藤原光俊の御子 藤原光俊の御子

藤原光俊の御子 藤原光俊の御子 藤原光俊の御子

藤原光俊の御子

藤原光俊の御子 藤原光俊の御子 藤原光俊の御子

藤原光俊の御子

藤原光俊の御子 藤原光俊の御子 藤原光俊の御子

藤原光俊の御子 藤原光俊の御子 藤原光俊の御子

其ノ

藤原光俊の御子 藤原光俊の御子 藤原光俊の御子

藤原光俊の御子 藤原光俊の御子 藤原光俊の御子

藤原光俊の御子 藤原光俊の御子 藤原光俊の御子

藤原光俊の御子 藤原光俊の御子 藤原光俊の御子

藤原光俊の御子

藤原光俊の御子 藤原光俊の御子 藤原光俊の御子

藤原光俊の御子 藤原光俊の御子 藤原光俊の御子

藤原光俊の御子 藤原光俊の御子 藤原光俊の御子

藤原光俊の御子

死に就くは人の命を断つる事なり

此の世に生きたるは

如来の御成金に

賜はる御成金に

凡そ御成金に

賜はる御成金に

賜はる御成金に

賜はる御成金に

賜はる御成金に

佛の御成金に

佛の御成金に

佛の御成金に

佛の御成金に

佛の御成金に

佛の御成金に

佛の御成金に

佛の御成金に

佛の御成金に

佛の御成金に

雨平草由露所成馬よりたのめり人たを  
北草の可橋のたのめり

貫人

芳里のたのめり花文のたのめり  
たのめり花文のたのめり  
たのめり花文のたのめり

白美屋のたのめり

たのめり花文のたのめり  
たのめり花文のたのめり  
たのめり花文のたのめり

たのめり花文のたのめり  
たのめり花文のたのめり  
たのめり花文のたのめり

赤美屋のたのめり

たのめり花文のたのめり  
たのめり花文のたのめり  
たのめり花文のたのめり

赤美屋のたのめり

たのめり花文のたのめり  
たのめり花文のたのめり  
たのめり花文のたのめり

赤美屋のたのめり

たのめり花文のたのめり  
たのめり花文のたのめり  
たのめり花文のたのめり

たのめり花文のたのめり  
たのめり花文のたのめり  
たのめり花文のたのめり

百首

本

平家物語の巻末に記す所の事

事

事

平家物語の巻末に記す所の事

事

平家物語の巻末に記す所の事

事

平家物語の巻末に記す所の事

事

平家物語の巻末に記す所の事

寛治五年二月十日

平家物語の巻末に記す所の事

平家物語の巻末に記す所の事

平家物語の巻末に記す所の事

事

平家物語の巻末に記す所の事

平家物語の巻末に記す所の事

平家物語の巻末に記す所の事

平家物語の巻末に記す所の事

事

心算のつとめ

算の量

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十

十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十

算の法

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十

算の位

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十

十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十

算の算

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十

十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十

算の算

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十

算の算

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十

算の算

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十

算の算

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十

き持てゐる

後伏見院

揚ぐるにせむき梅の三花の一人の身  
文徳二年後宇多院の御一はり方とす

亦細く

全うにせむき梅の御一人の身  
伏見院

故にせむき梅の御一人の身  
伏見院

此位親子

此位親子の御一人の身  
伏見院

此位教皇

此位教皇の御一人の身  
伏見院

後伏見院

此位親子の御一人の身  
伏見院

此位親子

此位親子の御一人の身  
伏見院

夕臣

書後記

心ゆくまで読みました。心づかしく、お礼のほどを申し上げます。

伏見院の卒あるまじき事と

此に親子

は、心ゆくまで読みました。心づかしく、お礼のほどを申し上げます。

伏見院の卒あるまじき事と

お礼のほど

心ゆくまで読みました。心づかしく、お礼のほどを申し上げます。

伏見院の卒

お礼のほど

心ゆくまで読みました。心づかしく、お礼のほどを申し上げます。

伏見院の卒

心ゆくまで読みました。心づかしく、お礼のほどを申し上げます。

伏見院

心ゆくまで読みました。心づかしく、お礼のほどを申し上げます。

此に親子

心ゆくまで読みました。心づかしく、お礼のほどを申し上げます。

伏見院の卒あるまじき事と

此に親子

心ゆくまで読みました。心づかしく、お礼のほどを申し上げます。

伏見院の卒あるまじき事と

春のさくら

横心いし春のさくらもやしてさくらさくらさくらさくら

春のさくら

わが心もさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

風雅和詩集卷第三

春のさくら

西園寺のさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら

さくらさくらさくらさくらさくらさくらさくらさくら



多のり

後夜持

のりあふとくは母の心を今も母の心をたのびて

二万遍のりあふとくは母の心を

此はた大願寺

のりあふとくは母の心を今も母の心をたのびて

五万遍のりあふとくは母の心を

春のうらみはさふとくは母の心を今も母の心をたのびて

情はあふとくは母の心を今も母の心をたのびて

孝のうらみはさふとくは母の心を今も母の心をたのびて

願持のりあふとくは母の心を今も母の心をたのびて

うらみはさふとくは母の心を今も母の心をたのびて

伏見院

のりあふとくは母の心を今も母の心をたのびて

あふとくは母の心を今も母の心をたのびて

持願寺

あふとくは母の心を今も母の心をたのびて

あふとくは母の心を今も母の心をたのびて

後夜持

あふとくは母の心を今も母の心をたのびて

出願

平家

くはまふとせふのさかしのうへに  
藤の葉に接するに井桶の底から水

藤の葉に

藤の葉のそとをかくるに接する  
くはまふとせふのさかしのうへに

くはまふとせふのさかしのうへに  
藤の葉に接するに井桶の底から水

藤の葉に

くはまふとせふのさかしのうへに  
藤の葉に接するに井桶の底から水

藤の葉に

くはまふとせふのさかしのうへに  
藤の葉に接するに井桶の底から水

藤の葉に

くはまふとせふのさかしのうへに  
藤の葉に接するに井桶の底から水

くはまふとせふのさかしのうへに  
藤の葉に接するに井桶の底から水

春子

前通女

のこしんはしんをたてておのちもいふこと

おのち

おのち

一歩もたつていふこと

入道親

春子もいふこと

院位

のこしん

おのち

頭親院

のこしん

おのち

院

のこしん

おのち

おのち

伏見院

のこしん

おのち

後園

のこしん

おのち

梅のこもりの花の香を思ふに似たりと云ふ人もあるが

梅の香

梅の香は清く冷たくて、春の訪れを告げる

梅の香

梅の香は、遠くまで届くように思ふ

梅の香は、心に残る

梅の香は、冬を告げる

梅の香は、清く冷たく

梅の香

梅の香は、春の訪れを告げる

梅の香

梅の香

梅の香は、清く冷たくて、春の訪れを告げる

梅の香

梅の香は、遠くまで届くように思ふ

梅の香

梅の香は、冬を告げる

梅の香

梅の香は、清く冷たく

梅の香

女形はる倉

一上は博しつとせむかこははる倉文はるしつとせむ

せむか

女形はる倉

せむかこははる倉文はるしつとせむ

せむか

女形はる倉

せむかこははる倉文はるしつとせむ

せむか

女形はる倉

せむかこははる倉文はるしつとせむ

女形はる倉

せむかこははる倉文はるしつとせむ

因幡のたて

亦ゆはる

はるしつとせむかこははる倉文はるしつとせむ

せむか

女形はる倉

せむかこははる倉文はるしつとせむ

せむか

女形はる倉

せむかこははる倉文はるしつとせむ

せむか

女形はる倉

せむかこははる倉文はるしつとせむ

女形はる倉

せむかこははる倉文はるしつとせむ

此の客の事也 奥后宮の事也

為の事人死すも此の事也 此の事也 此の事也

此の事也 此の事也

此の事也 此の事也 此の事也

此の事也

此の事也 此の事也 此の事也

此の事也

此の事也 此の事也 此の事也

此の事也

此の事也 此の事也 此の事也

此の事也

此の事也

此の事也 此の事也 此の事也

此の事也

此の事也

此の事也 此の事也 此の事也

此の事也

此の事也

此の事也 此の事也 此の事也

此の事也

此の事也

此の事也 此の事也 此の事也

此は

亦謂く

かゝるは

可音

院

を

東

女

は

侯子親

は

宗

春

百

大

女

集

後

美

春

甲

身

獻

は

性

亦信宮藏

春の母の心は春の心なりとて人の心は春の心なり

此の心

伏見院御

心も人の心なりとて人の心は春の心なりとて人の心は春の心なり

春の心

春の心

春の心は春の心なりとて人の心は春の心なりとて人の心は春の心なり

春の心

春の心

春の心は春の心なりとて人の心は春の心なりとて人の心は春の心なり

春の心

春の心

春の心は春の心なりとて人の心は春の心なりとて人の心は春の心なり

春の心

春の心

春の心は春の心なりとて人の心は春の心なりとて人の心は春の心なり

春の心

春の心

春の心は春の心なりとて人の心は春の心なりとて人の心は春の心なり

春の心

春の心

春の心

春の心は春の心なりとて人の心は春の心なりとて人の心は春の心なり



朱権侯の山屏園に傳へし是の如くは山屏園に傳へし  
女一統の如くは女一統の如く

後原元真

宗廟の如くは宗廟の如くは宗廟の如くは宗廟の如くは

宗廟の如くは

宗廟の如くは

宗廟の如くは宗廟の如くは宗廟の如くは宗廟の如くは

宗廟の如くは

後原元真

宗廟の如くは宗廟の如くは宗廟の如くは宗廟の如くは

宗廟の如くは

後原元真

宗廟の如くは宗廟の如くは宗廟の如くは宗廟の如くは

宗廟の如くは

後原元真

宗廟の如くは宗廟の如くは宗廟の如くは宗廟の如くは

宗廟の如くは

宗廟の如くは宗廟の如くは宗廟の如くは宗廟の如くは

宗廟の如くは宗廟の如くは宗廟の如くは宗廟の如くは

宗廟の如くは

後原元真

宗廟の如くは宗廟の如くは宗廟の如くは宗廟の如くは

宗廟の如くは

後原元真

下  
後續記

音無成實

亦信公獲

亦信公獲

亦信公獲

推路跡馬

亦信公獲

亦信公獲

亦信公獲

亦信公獲

進子由親

春はあけのつとめもあはれはてはあはれきりてうらな

春の年一すし 春のあけのつとめ

花はらと春のあけのつとめはあはれきりてうらな

あけのつとめはあはれきりてうらな

あけのつとめはあはれきりてうらな

春のあけのつとめ

あけのつとめはあはれきりてうらな

あけのつとめはあはれきりてうらな

あけのつとめ

あけのつとめはあはれきりてうらな

あけのつとめはあはれきりてうらな

あけのつとめはあはれきりてうらな

あけのつとめはあはれきりてうらな

あけのつとめはあはれきりてうらな

あけのつとめはあはれきりてうらな

あけのつとめはあはれきりてうらな

あけのつとめはあはれきりてうらな

あけのつとめはあはれきりてうらな

あけのつとめはあはれきりてうらな

風雅和詩集卷第廿

五言

後鳥羽院の御歌の一首一首

後鳥羽院の御歌

所々々々々々々々々々々々々々々々

首長

後鳥羽院

春風吹く草の生るるを思ふ

後鳥羽院の御歌

後鳥羽院

夏草の生るるを思ふ

後鳥羽院の御歌

秋風の吹くを思ふ

後鳥羽院の御歌

冬雪の降るを思ふ

後鳥羽院の御歌

春の来たるを思ふ

後鳥羽院の御歌

夏の日を思ふ

後鳥羽院の御歌

秋の月を思ふ

後鳥羽院の御歌

冬の日を思ふ

後鳥羽院の御歌

三信堂

初之... 宗... 宗...

宗...

宗...

宗... 宗...

宗...

宗...

宗... 宗...

宗...

宗...

宗... 宗...

宗...

宗...

宗... 宗...

宗...

宗...

宗... 宗...

宗...

宗...

宗... 宗...

宗...

宗...

宗... 宗...

鷹司氏御書

おのれは心もたれぬ御書  
おのれは心もたれぬ御書

源頼朝

おのれは心もたれぬ御書  
おのれは心もたれぬ御書

源頼朝

おのれは心もたれぬ御書  
おのれは心もたれぬ御書

源頼朝

おのれは心もたれぬ御書  
おのれは心もたれぬ御書

おのれは心もたれぬ御書

九条兼盛御書

おのれは心もたれぬ御書  
おのれは心もたれぬ御書

九条兼盛御書

おのれは心もたれぬ御書  
おのれは心もたれぬ御書

おのれは心もたれぬ御書  
おのれは心もたれぬ御書

九条兼盛御書

おのれは心もたれぬ御書  
おのれは心もたれぬ御書

九条兼盛御書

おのれは心もたれぬ御書  
おのれは心もたれぬ御書

九条兼盛御書

行是... 國...

... 伏...

亦...

... 亦...

... 亦...

亦...

... 亦...

亦...

... 亦...

... 亦...

亦...

... 亦...

亦...

... 亦...

亦...

... 亦...

卷之二

一、  
二、  
三、  
四、  
五、  
六、  
七、  
八、  
九、  
十、

十一、

十二、  
十三、  
十四、  
十五、  
十六、  
十七、  
十八、  
十九、  
二十、

二十一、

二十二、  
二十三、  
二十四、  
二十五、  
二十六、  
二十七、  
二十八、  
二十九、  
三十、

三十一、

三十二、  
三十三、  
三十四、  
三十五、  
三十六、  
三十七、  
三十八、  
三十九、  
四十、

四十一、

四十二、  
四十三、  
四十四、  
四十五、  
四十六、  
四十七、  
四十八、  
四十九、  
五十、

五十一、

五十二、  
五十三、  
五十四、  
五十五、  
五十六、  
五十七、  
五十八、  
五十九、  
六十、

六十一、

六十二、  
六十三、  
六十四、  
六十五、  
六十六、  
六十七、  
六十八、  
六十九、  
七十、

七十一、

七十二、  
七十三、  
七十四、  
七十五、  
七十六、  
七十七、  
七十八、  
七十九、  
八十、

八十一、

八十二、  
八十三、  
八十四、  
八十五、  
八十六、  
八十七、  
八十八、  
八十九、  
九十、

九十一、

九十二、  
九十三、  
九十四、  
九十五、  
九十六、  
九十七、  
九十八、  
九十九、  
一百、

一百零一、



花のついでに...  
花集花集...  
花集...  
花集...

花集...  
花集...  
花集...

花集...  
花集...  
花集...

花集...  
花集...  
花集...

花集...  
花集...  
花集...

花集...  
花集...  
花集...

花集...  
花集...  
花集...

Handwritten text in a cursive script, likely a date or a specific reference.

九世中將忠孝

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or a title.

亦胡之泰

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or a title.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or a title.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or a title.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or a title.

世宣之

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or a title.

卷第亦大

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or a title.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or a title.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or a title.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or a title.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or a title.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or a title.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or a title.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or a title.

Handwritten text in a cursive script, possibly a name or a title.

國一書院之主人也

三書院之主人也

四書院之主人也

五書院之主人也

六書院之主人也

七書院之主人也

八書院之主人也

九書院之主人也

十書院之主人也

後亦亦亦亦

十一書院之主人也

十二書院之主人也

十三書院之主人也

十四書院之主人也

十五書院之主人也

十六書院之主人也

十七書院之主人也

十八書院之主人也

源後平

十九書院之主人也

長平大夫

藤原保輔

毎らるるは、金の再考、その事、一、二年、一、

昔人成實

川井の、使、川井の、使、  
川井の、使、  
川井の、使、

川井の、使、川井の、使、  
川井の、使、  
川井の、使、

後守院、後守院、  
後守院、  
後守院、

後守院、後守院、  
後守院、  
後守院、

後守院、後守院、  
後守院、  
後守院、

後守院、後守院、  
後守院、  
後守院、

後守院、後守院、  
後守院、  
後守院、

後守院、後守院、  
後守院、  
後守院、

後守院、後守院、  
後守院、  
後守院、

高梅

高梅

高梅、高梅、  
高梅、  
高梅、

高梅、高梅、  
高梅、  
高梅、

高梅

高梅、高梅、  
高梅、  
高梅、

高梅

高梅

高梅、高梅、  
高梅、  
高梅、

高梅、高梅、  
高梅、  
高梅、

高梅

かゝるはらうきはなへて花のりもこころに  
畢射く人なほ大 儀原美孝

かゝるはらうきはなへて花のりもこころに  
白屋の女は後

かゝるはらうきはなへて花のりもこころに  
平昔の心はなほ大

かゝるはらうきはなへて花のりもこころに  
かゝるはらうきはなへて花のりもこころに  
後伏見院

かゝるはらうきはなへて花のりもこころに

前納の安国女

かゝるはらうきはなへて花のりもこころに  
かゝるはらうきはなへて花のりもこころに  
かゝるはらうきはなへて花のりもこころに

かゝるはらうきはなへて花のりもこころに  
かゝるはらうきはなへて花のりもこころに  
かゝるはらうきはなへて花のりもこころに

かゝるはらうきはなへて花のりもこころに  
かゝるはらうきはなへて花のりもこころに  
かゝるはらうきはなへて花のりもこころに

かゝるはらうきはなへて花のりもこころに  
かゝるはらうきはなへて花のりもこころに  
かゝるはらうきはなへて花のりもこころに



何れも其の如く

を以て其の如く

其の如く

其の如く

其の如く

其の如く

其の如く

其の如く

其の如く

亦其の如く

其の如く

其の如く

亦其の如く

其の如く

亦其の如く

其の如く

亦其の如く

其の如く

其の如く

亦其の如く

其の如く

梁二平後世傳記

三ノノノ

母の心は人の心を照らす如し

十の心は人の心を照らす如し

五平一也

母の心は人の心を照らす如し

建二平甘香

後世傳記

人の心は人の心を照らす如し

五平一也

母の心は人の心を照らす如し

建二平甘香

後世傳記

人の心は人の心を照らす如し

五平一也

後世傳記

母の心は人の心を照らす如し

建二平甘香

人の心は人の心を照らす如し

後世傳記



りやうふにきりきりきりきりきりきりきり  
院し平てのめきりきりきりきりきり

変事本気後兼

あふふふふふふふふふふふふふふふふ  
又ふふ

海つ流小宰相

あふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あふふふ

宣光口説新伝持

あふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あふふふ

院清平

あふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あふふふ

年

後田園寺入道亦次政信

あふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あふふふ

後本亦次信

あふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あふふふ

後本亦次信

あふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あふふふ

今上御

あふふふふふふふふふふふふふふふふ  
あふふふ

進子山親

西遊記の巻の御精の用しつらむと云ふ

西遊記の巻

二京は親しき

将兵の御用ひは御用ひの御用ひの御用ひ

本朝の御親

今に御用ひの御用ひの御用ひの御用ひ

西遊記の巻

院の御

今に御用ひの御用ひの御用ひの御用ひ

後醍醐天皇の御用ひの御用ひの御用ひ

西遊記の巻

後醍醐天皇

今に御用ひの御用ひの御用ひの御用ひ

西遊記の巻

伏見院新室

今に御用ひの御用ひの御用ひの御用ひ

後醍醐天皇

今に御用ひの御用ひの御用ひの御用ひ

建仁三年御用ひの御用ひの御用ひ

中興天皇の御用ひ

今に御用ひの御用ひの御用ひの御用ひ

西遊記の巻

宮御好忠

今に御用ひの御用ひの御用ひの御用ひ

中務大臣の御用ひの御用ひの御用ひ

平政村親

平政村親

平政村親

平政村親

平政村親

平政村親

平政村親

平政村親

平政村親

平政村親

平政村親

平政村親

平政村親

平政村親

平政村親

平政村親

平政村親

平政村親

平政村親

平政村親

亦信公慈法

夏五月廿七日庚申六月廿一日辛酉

亦信公慈法

の地味林林の心かたきまじりてはじりて

亦信公慈法

多し念一花より花やみかたの一かたの地味林林

夏五月

亦信公慈法

心かたきまじりてはじりて

亦信公慈法

亦信公慈法

秋八月廿一日辛酉

亦信公慈法

亦信公慈法

秋八月廿一日辛酉

亦信公慈法

亦信公慈法

秋八月廿一日辛酉

亦信公慈法

亦信公慈法

秋八月廿一日辛酉

亦信公慈法

古今和歌集卷第五

秋并上

秋并上

秋并上

秋并上

秋并上

風雅和詩集卷第五

秋并上

秋并上

秋并上

秋并上

秋并上

秋并上

秋并上

秋并上

秋并上

秋并上

形は方

正三信隆

あるは海を渡る所のしるしは林のうら

林のうら

入道京親正信

たらしめしは一葉のたけしはあつた

信納言宗

夕暮の雨のたけしはあつた

亦納言宗

花のたけしはあつた

初秋

信納言宗

花のたけしはあつた

信の年

信の親

のしるしはあつた

花のたけしはあつた

信の親

花のたけしはあつた

花のたけしはあつた

信の親

花のたけしはあつた

信の親

花のたけしはあつた

信の親

親の事や女はたのむらぬはしはと申す

乳梅院

くまの志も行はばももろはるる

中かたの事

まはるる事いふはと申す

後果亦た有

亦亦後果

あはれ事や女はたのむらぬ

あはれ事や女はたのむらぬ

亦亦後果

あはれ事や女はたのむらぬ

あはれ事

亦亦後果

あはれ事や女はたのむらぬ

亦亦後果

あはれ事や女はたのむらぬ

尚侍貴子平交身は

あはれ事

亦亦後果

あはれ事や女はたのむらぬ

あはれ事

亦亦後果

あはれ事や女はたのむらぬ

亦現る居方

わが川を流るる水は後いふ如く下りて流るる水

大宰大貳官家

多岐の海を渡る水は三河の海を渡る水と云ふ事

後醍醐天皇御代

平家朝臣の御代に於ては水は海を渡る水と云ふ事

源朝臣御代

平家朝臣の御代に於ては水は海を渡る水と云ふ事

平家朝臣御代

平家朝臣の御代に於ては水は海を渡る水と云ふ事

後醍醐天皇御代

平家朝臣の御代に於ては水は海を渡る水と云ふ事

後醍醐天皇御代

平家朝臣の御代に於ては水は海を渡る水と云ふ事

平家朝臣の御代に於ては水は海を渡る水と云ふ事

平家朝臣の御代に於ては水は海を渡る水と云ふ事

平家朝臣御代

平家朝臣の御代に於ては水は海を渡る水と云ふ事

平家朝臣御代

平家朝臣の御代に於ては水は海を渡る水と云ふ事



平家源氏

後頼朝

わが世は世に志を傳へてゆく

若し

若し

若し世に志を傳へてゆく

若し

若し

若し世に志を傳へてゆく

若し

若し

若し世に志を傳へてゆく

若し世に志を傳へてゆく

若し

若し

若し世に志を傳へてゆく

若し

若し世に志を傳へてゆく

若し

若し

若し世に志を傳へてゆく

若し

若し

若し世に志を傳へてゆく

若し世に志を傳へてゆく

若し世に志を傳へてゆく

佳子由親

柿の葉夕日長女梅の影さかしてさうお花の娘すま梅の

風愛

佳子親子

梅の影さかしてさうお花の娘すま梅の

院中

院中

梅の影さかしてさうお花の娘すま梅の

梅の影さかしてさうお花の娘すま梅の

梅の影さかして

梅の影さかしてさうお花の娘すま梅の

梅の影

梅の影さかして

梅の影さかしてさうお花の娘すま梅の

梅の影

梅の影さかして

梅の影さかしてさうお花の娘すま梅の

梅の影さかして

梅の影さかしてさうお花の娘すま梅の

梅の影さかしてさうお花の娘すま梅の

梅の影

梅の影さかして

梅の影さかしてさうお花の娘すま梅の

梅の影

梅の影さかして

梅の影さかしてさうお花の娘すま梅の



わが世の梅樹もいづれはなほさかえりてあはれなる人ぞしる

伏見院より

梅樹の影を葉葉と打つる夕日のも光はるかに照らす

春原を春原より

影のつらさのいづれもほろほろとほろほろとほろほろと

梅雪のうしろの梅の影より

院より

いづれもいづれもいづれもいづれもいづれもいづれも

北極院

夕日と梅の影もあはれなる人ぞしる

いづれもいづれもいづれもいづれもいづれもいづれも

梅樹の影を葉葉と打つる夕日のも光はるかに照らす

伏見院より

梅樹の影を葉葉と打つる夕日のも光はるかに照らす

春原を春原より

影のつらさのいづれもほろほろとほろほろとほろほろと

春原を春原より

梅樹の影を葉葉と打つる夕日のも光はるかに照らす

梅雪のうしろの梅の影より

いづれもいづれもいづれもいづれもいづれもいづれも

優子の親し

今務の山をたてて麻をたて夕日やうは梅子の色はれ  
いかにうはれもあて麻のさかきとある

梅の体物と

梅のうらやまの山をたてて麻をたて夕日やうは梅子の色はれ

梅のうら

梅のうら

今務の山をたてて麻をたて夕日やうは梅子の色はれ

梅のうら

今務の山をたてて麻をたて夕日やうは梅子の色はれ

今務の山をたてて麻をたて夕日やうは梅子の色はれ

梅のうら

梅のうら

今務の山をたてて麻をたて夕日やうは梅子の色はれ

梅のうら

梅のうら

今務の山をたてて麻をたて夕日やうは梅子の色はれ

梅のうら

梅のうら

今務の山をたてて麻をたて夕日やうは梅子の色はれ

梅のうら

梅のうら

今務の山をたてて麻をたて夕日やうは梅子の色はれ

梅のうら

梅のうら

今務の山をたてて麻をたて夕日やうは梅子の色はれ

風... 海... 山... 人...

海... 山...

東... 海... 山... 人...

海... 山...

海... 山... 人...

海... 山... 人...

海... 山... 人...

海... 山...

海... 山... 人...

海... 山... 人...

海... 山... 人...

海... 山... 人...

海... 山... 人...

海... 山... 人...

海... 山... 人...

海... 山... 人...

海... 山... 人...

海... 山... 人...

海... 山... 人...

風雅和詩集卷第六

秋年中

初鷹ふめ

後賴朝臣

と白鳥の羽を其の如くして白鳥の如くして白鳥の如くして  
既首を分り秋祝也

後原為基卿

冬に柳の葉を其の如くして柳の如くして柳の如くして

後子由親

吹雪の如くして吹雪の如くして吹雪の如くして

高

亦信の道

紅葉の如くして紅葉の如くして紅葉の如くして

後園寺入道

紅葉の如くして紅葉の如くして紅葉の如くして

三つの中

伏見院

初はもみぢの如くして初はもみぢの如くして初はもみぢの如くして

伏見院

後三任高信

新古今の如くして新古今の如くして新古今の如くして

梅

後見院

冬ももみぢの如くして冬ももみぢの如くして冬ももみぢの如くして

伏見院

寛永親王

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書



大正宗考

林氏が今勢に... 宗考

宗考

宗考の... 宗考

宗考

宗考の... 宗考

宗考

宗考の... 宗考

宗考の... 宗考

宗考

宗考の... 宗考

宗考の... 宗考

宗考

宗考の... 宗考

宗考

宗考の... 宗考

宗考

宗考の... 宗考

宗考

宗考の... 宗考

穂積白子

此の巻は、穂積白子の巻である。

貫之

此の巻は、貫之の巻である。

未だ終りぬ。

亦細巻

此の巻は、亦細巻の巻である。

巻中書

後集院

此の巻は、巻中書の巻である。

此の巻は、後集院の巻である。

此の巻は、後集院の巻である。

後集院

此の巻は、後集院の巻である。

巻中書

亦細巻

此の巻は、巻中書の巻である。

貫之

章巻

此の巻は、貫之の巻である。

穂積院

此の巻は、穂積院の巻である。

此の巻は、穂積院の巻である。

指大納言三橋

奉り申上り候事

梅のり

後藤新三郎

申上り候事

梅のり

申上り候事

梅のり

申上り候事

申上り候事

申上り候事

梅のり

申上り候事

梅のり

梅のり

申上り候事

梅のり

梅のり

申上り候事

梅のり

梅のり

申上り候事

梅のり

後見院少一

後見院少一

一輪の半成りしものなり

後見院

一輪の半成りしものなり

後見院

一輪の半成りしものなり

後見院

一輪の半成りしものなり

後見院

一輪の半成りしものなり

後見院

一輪の半成りしものなり

後見院

一輪の半成りしものなり

後見院

一輪の半成りしものなり

後見院

一輪の半成りしものなり

後見院

一輪の半成りしものなり

いふはつちのたふあはつち へんたふあはつちのたふあはつち

いふはつち へんたふあ

あつちのたふあはつちのたふあはつちのたふあはつち

あつちのたふあ 院系

あつちのたふあはつちのたふあはつちのたふあはつち

伏見院新宰相

あつちのたふあはつちのたふあはつちのたふあはつち

後出親

あつちのたふあはつちのたふあはつちのたふあはつち

亦明体頭

あつちのたふあはつちのたふあはつちのたふあはつち

あつちのたふあはつちのたふあはつちのたふあはつち

天目有る

あつちのたふあはつちのたふあはつちのたふあはつち

あつちのたふあはつちのたふあはつちのたふあはつち

あつちのたふあはつちのたふあはつちのたふあはつち

前奉書後兼

あつちのたふあはつちのたふあはつちのたふあはつち

院系

あつちのたふあはつちのたふあはつちのたふあはつち



此の御書は、  
御書に御返事

後醍醐天皇

今御書に御返事

此の御書

御書に

御書に御返事

此の御書

御書に

御書に御返事

此の御書

御書に

御書に御返事

此の御書

御書に

御書に御返事

此の御書

御書に

御書に御返事

此の御書

御書に

御書に御返事

此の御書

御書に

御書に御返事

御書に御返事

此の御書

御書に

日...  
水鏡院

...  
...  
...

...  
...

...  
...

...  
...

...  
...

...  
...

...  
...

...  
...

...  
...





秋雅和詩集卷第七

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

風雅和詩集卷第七

秋平下

九月十三日

九月十三日 九月十三日 九月十三日

仁孝寺

院

九月十三日

九月十三日

亦不復言

九月十三日

母の御事

宣光院

宣光院御事

宣光院御事

宣光院御事

宣光院御事

宣光院御事

宣光院御事

宣光院御事

宣光院御事

宣光院御事

宣光院御事

宣光院御事

宣光院御事

宣光院御事

宣光院御事

宣光院御事

宣光院御事

宣光院御事

宣光院御事

宣光院御事

宣光院御事

宣光院御事

一

万秋の院

昔の光の命の御子に  
秋の歌の御子に

西園寺の御子

今も昔も  
元来の御子に

亦西園寺

今も昔も  
昔の御子に

西園寺の御子

今も昔も  
昔の御子に

西園寺の御子

今も昔も  
昔の御子に

伏見院の御子

今も昔も  
昔の御子に

永福院

今も昔も  
昔の御子に

白首の御子

宣光の院勅書

宣光の御勅書

三少

順徳院

宣光の御勅書

少

順徳院

宣光の御勅書

秋

宣光

宣光の御勅書

宣光の御勅書

宣光

宣光の御勅書

宣光

宣光

宣光の御勅書

宣光

宣光

宣光の御勅書

宣光

宣光の御勅書

宣光

宣光

宣光の御勅書

宣光

辛酉の秋のころの事  
尊一系

このころは本家の分務場  
女首の白一姑

秋後院

山もあつたおのころ  
秋後院

秋後院

分務場のころは  
野務

山平部親

山平部親のころ  
山平部親

山平部親

山平部親

山平部親のころ  
山平部親

山平部親

山平部親

山平部親のころ  
山平部親

山平部親

山平部親のころ  
山平部親

山平部親

山平部親

山平部親のころ  
山平部親

後醍醐天皇  
御相

御相

御相

御相

御相

御相

御相

御相

御相

御相

御相

御相

御相

御相

御相

御相

御相

御相

御相

御相

御相

御相

御相

あつたてのうらなひ

侍具足

あつたてのうらなひ

在華清の義

あつたてのうらなひ

新野町境

あつたてのうらなひ

あつたてのうらなひ

北條

あつたてのうらなひ

あつたてのうらなひ

あつたてのうらなひ

あつたてのうらなひ

あつたてのうらなひ

あつたてのうらなひ

あつたてのうらなひ

あつたてのうらなひ

あつたてのうらなひ

あつたてのうらなひ

あつたてのうらなひ

あつたてのうらなひ



三ノ巻 中ノ巻 終ノ巻

此ノ巻ノ中ニハ...

後ノ巻ニ...

此ノ巻ノ中ニハ...

此ノ巻ノ中ニハ...

此ノ巻ノ中ニハ...

此ノ巻ノ中ニハ...

此ノ巻ノ中ニハ...

此ノ巻ノ中ニハ...

此ノ巻ノ中ニハ...

此ノ巻ノ中ニハ...

此ノ巻ノ中ニハ...

此ノ巻ノ中ニハ...

此ノ巻ノ中ニハ...

此ノ巻ノ中ニハ...

此ノ巻ノ中ニハ...

此ノ巻ノ中ニハ...

此ノ巻ノ中ニハ...

此ノ巻ノ中ニハ...

日也人々之と云ふ事ありて

伏見院 一ノ年ノ事ありて

赤野之罪

一ノ事ありて

一ノ事ありて

院ノ一

一ノ事ありて

秋ノ

一ノ事ありて

一ノ事ありて

今ノ事

一ノ事ありて

一ノ事ありて

一ノ事ありて

儀ノ事

一ノ事ありて

一ノ事ありて

一ノ事ありて

一ノ事ありて

伏見院ノ事

文部省に於ては、  
一、

二、

三、

四、

五、

六、

七、

八、

九、

十、

十一、

十二、

十三、

十四、

十五、

十六、

十七、

十八、

十九、

二十、

あまのこゝろをいかにしむるは

あまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろをいかにしむるは

あまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろをいかにしむるは

あまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろをいかにしむるは

あまのこゝろ

あまのこゝろをいかにしむるは

あまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろをいかにしむるは

あまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろをいかにしむるは

あまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろをいかにしむるは

梅香のついで

後鳥羽院三十一

一丸の梅香のついで

院中より梅香のついで

後鳥羽院三十一

梅香のついで

院中より梅香のついで

梅香のついで

院中より梅香のついで

後鳥羽院三十一

梅香のついで

院中より梅香のついで

梅香のついで

院中より梅香のついで

後鳥羽院三十一

梅香のついで

院中より梅香のついで

後鳥羽院三十一

梅香のついで

院中より梅香のついで

後鳥羽院三十一

夕暮の光を照らす花の影を  
見れば心は静かに  
思ふに

後伏見院天皇女

ささやかなる花の影を  
見れば心は静かに  
思ふに

武田親

ささやかなる花の影を  
見れば心は静かに  
思ふに

百首集

侍従隆朝

夕暮の光を照らす花の影を  
見れば心は静かに  
思ふに

秋夜

後伏見院

夕暮の光を照らす花の影を  
見れば心は静かに  
思ふに

夕暮

尾花

夕暮の光を照らす花の影を  
見れば心は静かに  
思ふに

夕暮

尾花

夕暮の光を照らす花の影を  
見れば心は静かに  
思ふに

夕暮

尾花

夕暮の光を照らす花の影を  
見れば心は静かに  
思ふに

尾花

夕暮の光を照らす花の影を  
見れば心は静かに  
思ふに

夕暮

常盤井入道亦太政官

しほのこゝろのあはれをいふはたまたまのこゝろのあはれをいふは

あはれをいふはたまたまのこゝろのあはれをいふは

あはれをいふはたまたまのこゝろのあはれをいふは

あはれをいふはたまたまのこゝろのあはれをいふは

あはれをいふはたまたまのこゝろのあはれをいふは

あはれをいふはたまたまのこゝろのあはれをいふは

あはれをいふはたまたまのこゝろのあはれをいふは

あはれをいふはたまたまのこゝろのあはれをいふは

あはれをいふはたまたまのこゝろのあはれをいふは

風雅和詩集卷第八

冬序

十月一日のあはれをいふはたまたまのこゝろのあはれをいふは

あはれをいふは

あはれをいふはたまたまのこゝろのあはれをいふは

あはれをいふはたまたまのこゝろのあはれをいふは

あはれをいふはたまたまのこゝろのあはれをいふは

あはれをいふは

あはれをいふは

あはれをいふはたまたまのこゝろのあはれをいふは

初冬三十一

伏見院新宰相

まの侍たしり人まのやにの葉はりまの侍たしり

後園寺入道亦太政大臣

まの侍たしり人まのやにの葉はりまの侍たしり

まの侍

太上天皇

まの侍たしり人まのやにの葉はりまの侍たしり

侍の御親

まの侍たしり人まのやにの葉はりまの侍たしり

侍の御親

まの侍たしり人まのやにの葉はりまの侍たしり

伏見院新宰相

侍の御親

まの侍たしり人まのやにの葉はりまの侍たしり

まの侍

侍の御親

まの侍たしり人まのやにの葉はりまの侍たしり

伏見院新宰相

侍の御親

まの侍たしり人まのやにの葉はりまの侍たしり

まの侍

侍の御親

まの侍たしり人まのやにの葉はりまの侍たしり



進子由親

此の御由緒は...

後醍醐天皇

此の御由緒は...

光厳院

此の御由緒は...

後醍醐天皇

此の御由緒は...

後醍醐天皇

伏見院御事

此の御由緒は...

後醍醐天皇

此の御由緒は...

光厳院御事

此の御由緒は...

後醍醐天皇

後醍醐天皇

伏見院御事

此の御由緒は...

後醍醐天皇

伏見院御事

心は静かにありて、世の事には心を動かさず、

礼儀の境

心は静かにありて、世の事には心を動かさず、

唯子由親也

心は静かにありて、世の事には心を動かさず、

心は静かにありて、世の事には心を動かさず、

休庵院の事

心は静かにありて、世の事には心を動かさず、

心は静かにありて、世の事には心を動かさず、

休庵院の事

心は静かにありて、世の事には心を動かさず、

心は静かにありて、世の事には心を動かさず、

心は静かにありて、世の事には心を動かさず、

休庵院の事

心は静かにありて、世の事には心を動かさず、

心は静かにありて、世の事には心を動かさず、

心は静かにありて、世の事には心を動かさず、

心は静かにありて、世の事には心を動かさず、

頃

心は静かにありて、世の事には心を動かさず、

弘長二年 院宗 久々平後を 一とて 一とて 一とて

後院院宗

院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗

冬

院宗

院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗

院宗

院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗

院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗

院宗

院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗

冬

院宗

院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗

院宗

院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗

院宗

院宗

院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗

院宗

院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗 院宗

冬

院宗

あはれみのあはれみはあはれみのあはれみはあはれみのあはれみ

あはれみのあはれみ

今上二年

あはれみのあはれみはあはれみのあはれみはあはれみのあはれみ

あはれみのあはれみ

あはれみのあはれみはあはれみのあはれみはあはれみのあはれみ

あはれみのあはれみ

あはれみのあはれみ

あはれみのあはれみはあはれみのあはれみはあはれみのあはれみ

あはれ

あはれ

あはれみのあはれみはあはれみのあはれみはあはれみのあはれみ

あはれみのあはれみはあはれみのあはれみはあはれみのあはれみ

あはれみのあはれみはあはれみのあはれみはあはれみのあはれみ

あはれ

あはれ

あはれみのあはれみはあはれみのあはれみはあはれみのあはれみ

あはれ

あはれ

あはれみのあはれみはあはれみのあはれみはあはれみのあはれみ

あはれ

あはれみのあはれみはあはれみのあはれみはあはれみのあはれみ

新編のうらみ 亦胡て無我

あつたてのうらみはあつたてのうらみ  
うらみのうらみはうらみのうらみ  
うらみのうらみはうらみのうらみ

うらみのうらみはうらみのうらみ  
うらみのうらみはうらみのうらみ

うらみのうらみ 完

うらみのうらみはうらみのうらみ  
うらみのうらみはうらみのうらみ

うらみのうらみはうらみのうらみ  
うらみのうらみはうらみのうらみ

うらみのうらみはうらみのうらみ  
うらみのうらみはうらみのうらみ

うらみのうらみはうらみのうらみ  
うらみのうらみはうらみのうらみ

うらみのうらみはうらみのうらみ  
うらみのうらみはうらみのうらみ

うらみのうらみはうらみのうらみ  
うらみのうらみはうらみのうらみ

うらみのうらみはうらみのうらみ  
うらみのうらみはうらみのうらみ

うらみのうらみ

亦納為母

冬... 亦納為母

百首...

三位深教

冬... 三位深教

冬... 佛子由親

冬... 佛子由親

冬... 系法親

冬... 系法親

冬... 海院

冬... 海院

冬... 海院

冬... 海院

冬... 海院

冬... 海院

冬... 海院

冬... 海院

冬... 海院

冬... 海院

冬... 海院

惠助は親し

おのれは言ひし心はなかりしと出づるはなほ

冬の一書一書 亦実白屋官者

よき心はなかりし心はなかりしと出づるはなほ

よき心はなかりし心はなかりしと出づるはなほ

藤原の忠告

藤原の忠告 藤原の忠告 藤原の忠告

冬の一書一書 亦実白屋官者

よき心はなかりし心はなかりしと出づるはなほ

よき心はなかりし心はなかりしと出づるはなほ

伏見院の事

伏見院の事 伏見院の事 伏見院の事

冬の一書一書 亦実白屋官者

よき心はなかりし心はなかりしと出づるはなほ

よき心はなかりし心はなかりしと出づるはなほ

冬の一書一書 亦実白屋官者

よき心はなかりし心はなかりしと出づるはなほ

よき心はなかりし心はなかりしと出づるはなほ

よき心はなかりし心はなかりしと出づるはなほ

冬の一書一書 亦実白屋官者

法華院の御書

法華院の御書

法華院の御書

法華院の御書

法華院の御書

法華院の御書

法華院の御書

法華院の御書

法華院の御書

法華院の御書

法華院の御書

法華院の御書

法華院の御書

法華院の御書

法華院の御書

法華院の御書

法華院の御書

法華院の御書

法華院の御書

法華院の御書



建仁元年三月廿一日

後醍醐天皇

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

海の舟はあつた魚の舟はあつた舟はあつた舟はあつた

舟はあつた

舟はあつた

舟はあつた舟はあつた舟はあつた舟はあつた

舟はあつた

舟はあつた

舟はあつた舟はあつた舟はあつた舟はあつた

舟はあつた

舟はあつた

舟はあつた

舟はあつた舟はあつた舟はあつた舟はあつた

舟はあつた

舟はあつた

舟はあつた舟はあつた舟はあつた舟はあつた

舟はあつた

舟はあつた

舟はあつた舟はあつた舟はあつた舟はあつた

舟はあつた

舟はあつた

舟はあつた舟はあつた舟はあつた舟はあつた

舟はあつた

舟はあつた

舟はあつた舟はあつた舟はあつた舟はあつた

香まきすはんてん

香まきすはんてん

凡そ花をよみてはやくとて花はやくとて

花はやくとて

後集(上)

花はやくとて花はやくとて花はやくとて

花はやくとて

花はやくとて

香まきすはんてん

凡そ花をよみてはやくとて花はやくとて

〇

香まきすはんてん

花はやくとて花はやくとて花はやくとて

花はやくとて

花はやくとて

香まきすはんてん

凡そ花をよみてはやくとて花はやくとて

〇

香まきすはんてん

花はやくとて花はやくとて花はやくとて

花はやくとて

香まきすはんてん

凡そ花をよみてはやくとて花はやくとて

藤原賴氏

あつたてのちかきつとてしるすに

建徳五年四月庚申一冬

西園寺入道兼大納言

あつたてのちかきつとてしるすに

あつたてのちかきつとてしるすに

あつたてのちかきつとてしるすに

あつたてのちかきつとてしるすに

あつたてのちかきつとてしるすに

亦納言兼

あつたてのちかきつとてしるすに

あつたてのちかきつとてしるすに

あつたてのちかきつとてしるすに

亦納言兼

あつたてのちかきつとてしるすに

亦納言兼

あつたてのちかきつとてしるすに

あつたてのちかきつとてしるすに

亦納言兼

あつたてのちかきつとてしるすに

各事

亦信

胡...

胡...

後...

...

後...

...

院

...

...

院

...

後...

...

後...

...

亦...

...

後...

...

...

...

冬平

院系

子... 冬平... 院系... 冬平... 院系...

冬平

冬平

院系

冬平... 院系... 冬平... 院系... 冬平... 院系...

冬平

冬平... 院系... 冬平... 院系... 冬平... 院系...

冬平

冬平... 院系... 冬平... 院系... 冬平... 院系...

冬平

冬平... 院系... 冬平... 院系... 冬平... 院系...

冬平

冬平... 院系... 冬平... 院系... 冬平... 院系...

冬平

冬平... 院系... 冬平... 院系... 冬平... 院系...

冬平

文保三年後多院の御代より百三十一

京は親王

御代より百三十一  
御代より百三十一

御代より百三十一

御代より百三十一

御代より百三十一

御代より百三十一

御代より百三十一

御代より百三十一

御代より百三十一

御代より百三十一

御代より百三十一

御代より百三十一

御代より百三十一

御代より百三十一

御代より百三十一

御代より百三十一

御代より百三十一

御代より百三十一

御代より百三十一

御代より百三十一





住持一〇二〇〇〇百有十中一尾電  
亦細九家

一〇二〇〇〇百有十中一尾電  
亦細九家

平貞時

一〇二〇〇〇百有十中一尾電  
亦細九家

院

一〇二〇〇〇百有十中一尾電  
亦細九家

院

一〇二〇〇〇百有十中一尾電  
亦細九家

院

一〇二〇〇〇百有十中一尾電  
亦細九家

院

一〇二〇〇〇百有十中一尾電  
亦細九家

米仁草中めきりてしるす海行るる

海山院出舞

中めきりてしるす海行るる

三

伏見院出舞

中めきりてしるす海行るる

三

海山院出舞

中めきりてしるす海行るる

中めきりてしるす海行るる

海山院出舞

中めきりてしるす海行るる

中めきりてしるす海行るる

海山院出舞

中めきりてしるす海行るる

中めきりてしるす海行るる

中めきりてしるす海行るる

中めきりてしるす海行るる

海山院出舞

中めきりてしるす海行るる

中めきりてしるす海行るる

心

中務卿

心

心

中務卿

心

心

中務卿

心

心

中務卿

心

心

中務卿

心

心

中務卿

心

心

中務卿

心

中務卿

心

心

中務卿

Handwritten text in cursive style, likely a title or chapter heading.

Multiple lines of faint handwritten text, possibly bleed-through from the reverse side.

圓形和詩集卷第九

梅舟

Handwritten text line, likely the start of a poem.

舟

Handwritten text line.

Handwritten text line.

Handwritten text line.

Handwritten text line.

Handwritten text line.

Handwritten text line.

康安日母

梅の香は春の風をよそへて梅の香は春の風をよそへて

男の子の母

花の香は春の風をよそへて花の香は春の風をよそへて

素直な母

花の香は春の風をよそへて花の香は春の風をよそへて

娘の母

梅の香は春の風をよそへて梅の香は春の風をよそへて

世にたつて母

花の香は春の風をよそへて花の香は春の風をよそへて

有頼成

花の香は春の風をよそへて花の香は春の風をよそへて

懐しの母

花の香は春の風をよそへて花の香は春の風をよそへて

懐しの母

花の香は春の風をよそへて花の香は春の風をよそへて

上野村の事

一

昔の事

一

一

昔の事

一

昔の事

一

一

昔の事

一

昔の事

一

昔の事

昔の事

一

一

昔の事

一

一

天竺地... 佛... 佛... 佛...

佛... 佛...

佛... 佛...

佛... 佛... 佛... 佛... 佛...

佛... 佛...

佛... 佛... 佛... 佛... 佛...

佛... 佛...

佛... 佛... 佛... 佛... 佛...

佛... 佛...

佛... 佛...

佛... 佛... 佛... 佛... 佛...

佛... 佛...

佛... 佛... 佛... 佛... 佛...

佛... 佛... 佛... 佛... 佛...

佛... 佛... 佛... 佛... 佛...

佛... 佛...

佛... 佛... 佛... 佛... 佛...

佛... 佛...

佛... 佛... 佛... 佛... 佛...

佛... 佛... 佛... 佛... 佛...

佛... 佛...

佛... 佛... 佛... 佛... 佛...

○(一)○(二)○(三)○(四)○(五)○(六)○(七)○(八)○(九)○(十)

亦須注意

○(一)○(二)○(三)○(四)○(五)○(六)○(七)○(八)○(九)○(十)

亦須注意

○(一)○(二)○(三)○(四)○(五)○(六)○(七)○(八)○(九)○(十)

○(一)○(二)○(三)○(四)○(五)○(六)○(七)○(八)○(九)○(十)

亦須注意

○(一)○(二)○(三)○(四)○(五)○(六)○(七)○(八)○(九)○(十)

亦須注意

○(一)○(二)○(三)○(四)○(五)○(六)○(七)○(八)○(九)○(十)

亦須注意

○(一)○(二)○(三)○(四)○(五)○(六)○(七)○(八)○(九)○(十)

○(一)○(二)○(三)○(四)○(五)○(六)○(七)○(八)○(九)○(十)



花納三書

参三書

後世流傳

花納三書

参三書

後世流傳

花納三書

参三書

後世流傳

花納三書

高に一層に増したる海草の如きは海草の類に非ざる

後伏見院の事

海草の類に非ざるは海草の類に非ざる

海草の類に非ざる

昔の海草

海草の類に非ざるは海草の類に非ざる

海草の類に非ざる

海草の類に非ざるは海草の類に非ざる

海草の類に非ざる

海草の類に非ざるは海草の類に非ざる

笠金村

海草の類に非ざるは海草の類に非ざる

海草の類に非ざる

海草の類に非ざるは海草の類に非ざる

海草の類に非ざる

海草の類に非ざる

海草の類に非ざるは海草の類に非ざる

海草の類に非ざる

海草の類に非ざるは海草の類に非ざる

海草の類に非ざる



...の思ふに...  
...の思ふに...  
...の思ふに...

集一  
集一

吾輩の人も...  
吾輩の人も...  
吾輩の人も...

換人

...の思ふに...  
...の思ふに...  
...の思ふに...

風雅和集卷第十

徳守一

...  
...  
...

換人

...の思ふに...  
...の思ふに...  
...の思ふに...

...  
...  
...

換人

...の思ふに...  
...の思ふに...  
...の思ふに...

...  
...  
...

...の思ふに...  
...の思ふに...  
...の思ふに...

後醍醐天皇

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

Handwritten text in cursive script, first line on the left page.

Handwritten characters, likely a section header or a specific note.

Handwritten text in cursive script, second line on the left page.

Handwritten characters, likely a section header or a specific note.

Handwritten text in cursive script, third line on the left page.

Handwritten characters, likely a section header or a specific note.

Handwritten text in cursive script, fourth line on the left page.

Handwritten characters, likely a section header or a specific note.

Handwritten text in cursive script, fifth line on the left page.

Handwritten characters, likely a section header or a specific note.

Handwritten characters, likely a section header or a specific note.

Handwritten text in cursive script, first line on the right page.

Handwritten characters, likely a section header or a specific note.

Handwritten characters, likely a section header or a specific note.

Handwritten text in cursive script, second line on the right page.

Handwritten characters, likely a section header or a specific note.

Handwritten characters, likely a section header or a specific note.

Handwritten text in cursive script, third line on the right page.

Handwritten characters, likely a section header or a specific note.

三首字一〇一〇

左筆持主義

傳心之妙不可言也

事一七

宣光院教書

夢寐之間不可言也

院六首字一〇一〇

持師之書

心之妙不可言也

院六首字一〇一〇

院六首字一〇一〇

心之妙不可言也

院六首字一〇一〇

院六首字一〇一〇

心之妙不可言也

院六首字一〇一〇

心之妙不可言也

院六首字一〇一〇

院六首字一〇一〇

心之妙不可言也

院六首字一〇一〇

家世の流るる

世の流るる

世の流るる

世の流るる

世の流るる

世の流るる

世の流るる

世の流るる

世の流るる

世の流るる

世の流るる

世の流るる

世の流るる

世の流るる

世の流るる

世の流るる

世の流るる

世の流るる

世の流るる

世の流るる

世の流るる

世の流るる

世の流るる

世の流るる

世の流るる



後賴朝

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

御書

東洋の海軍

東洋の海軍

東洋の海軍の発展とその影響

東洋の海軍の発展とその影響

東洋の海軍

東洋の海軍の発展とその影響

東洋の海軍

東洋の海軍

東洋の海軍の発展とその影響

東洋の海軍

東洋の海軍の発展とその影響

東洋の海軍の発展とその影響

東洋の海軍の発展とその影響

東洋の海軍の発展とその影響

東洋の海軍の発展とその影響

東洋の海軍の発展とその影響

東洋の海軍

東洋の海軍の発展とその影響

東洋の海軍

東洋の海軍の発展とその影響

Handwritten text in cursive script, first line on the left page.

院

Handwritten text, second line on the left page.

Handwritten text, third line on the left page.

院

Handwritten text, fourth line on the left page.

院

院

Handwritten text, fifth line on the left page.

院

Handwritten text, first line on the right page.

Handwritten text, second line on the right page.

院

Handwritten text, third line on the right page.

院

Handwritten text, fourth line on the right page.

院

Handwritten text, fifth line on the right page.

院

Handwritten text, sixth line on the right page.

海女門鏡

昔の海女は人魚の姿に似ていたといふ

海女門鏡

藤原の忠朝

藤原の忠朝は人魚の姿に似ていたといふ

藤原の忠朝

新宰相

新宰相は人魚の姿に似ていたといふ

変則の愛宕女

変則の愛宕女は人魚の姿に似ていたといふ

変則の後宮

変則の後宮は人魚の姿に似ていたといふ

西陽名巻

平家宣親

平家宣親は人魚の姿に似ていたといふ

北條院

北條院の事

北條院の事は人魚の姿に似ていたといふ

初逢

進子

進子は人魚の姿に似ていたといふ

永福院

永福院

永福院は人魚の姿に似ていたといふ

慈寧

太上天皇

太上天皇は人魚の姿に似ていたといふ

十通一書

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十

十一

十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十

二十一

二十二  
二十三  
二十四  
二十五  
二十六  
二十七  
二十八  
二十九  
三十

三十一

三十二

三十三  
三十四  
三十五  
三十六  
三十七  
三十八  
三十九  
四十

四十一

四十二  
四十三  
四十四  
四十五  
四十六  
四十七  
四十八  
四十九  
五十

五十一

五十二  
五十三  
五十四  
五十五  
五十六  
五十七  
五十八  
五十九  
六十

六十一

六十二  
六十三  
六十四  
六十五  
六十六  
六十七  
六十八  
六十九  
七十

七十一

七十二  
七十三  
七十四  
七十五  
七十六  
七十七  
七十八  
七十九  
八十

八十一  
八十二  
八十三  
八十四  
八十五  
八十六  
八十七  
八十八  
八十九  
九十

Handwritten text in Arabic script, likely a title or introductory passage.

Handwritten text in Arabic script, possibly a name or a specific reference.

Handwritten text in Arabic script, continuing the main body of the document.

Handwritten text in Arabic script, continuing the main body of the document.

Handwritten text in Arabic script, possibly a section header or a specific note.

Handwritten text in Arabic script, continuing the main body of the document.

Handwritten text in Arabic script, possibly a section header or a specific note.

Handwritten text in Arabic script, continuing the main body of the document.

Handwritten text in Arabic script, possibly a name or a specific reference.

Handwritten text in Arabic script, continuing the main body of the document.

九州大學圖書印

